

まえがき

榎田夫雄 (hcb00537@nifty.ne.jp)

この報告書は、ラジオスタジオにおける秩序の相互行為的分析をテーマとして行った1997年度徳島大学総合科学部開講科目「社会調査実習」（国際社会文化研究コースの選択必修科目であるが、コース内の組織である現代国際社会分野に所属している学生に関しては履修することを原則として義務づけている）の報告書である。

調査に協力していただいたABC放送（情報源秘匿のため仮名）、FMやまのは（同左）、関西放送文化連盟、放送芸術学院、ビジュアルアーツ専門学校・大阪の関係諸氏に感謝を申し上げたい。また、2度にわたって不足していた研究機材（ビデオカメラ等）を快く貸与して下さった高橋晋一先生（徳島大学）のご厚意がなければ、本実習調査は成立しなかった。御礼申し上げます。また、東京や筑波での私的研究会においてビデオデータに関する様々な分析上の指針を提示してくれた岡田光弘（筑波大学）、森田聴之（明治学院大学）、周藤真也（筑波大学）の各氏にもお礼の言葉を申し上げたい。折々に受けた助言をほとんどそのまま踏襲する形でなんとか年度内に研究の原稿化をすることができた。本書がいささかなりとも、この分野（相互行為分析、あるいは、エスノメソドロジー的ワークスペース研究）の研究の進歩に貢献するものとなっているならば、そのかなりの部分は上記3氏の高水準のコメントのおかげである。

なお、使用した機材（ビデオダビングマシン、ビデオプリンター等）の多くは徳島大学の備品だが、年度末になってさらに、「総合的教育・研究活動助成費」10万円が徳島大学総合科学部から与えられ、研究の進展と取りまとめに大いに役だった。学部当局のご配慮にも謝意を表したい。

さて、残りの紙幅で、私の調査実習の方針の簡単な解説と結びつけながら、班名の由来などの、本冊所収の諸論文の読解に役立つと思われる若干の情報提供をしておきたい。

まず、調査実習の目的と、方法としてビデオ分析を採用したことについて。

わたしは、大学の学部における社会科学学習の中心的課題は、「社会」というものをどのようにして実感するか、ということにあると思っている。もちろん、「社会」を実感させるために古典を読ませる、というような方針が取られることもある。けれども、残念ながら、書物からその書物に書かれた「社会」の手触りを感じ取らせる作業には、かなりの分量の、本人自身の読書経験と教員による解説が必要である。幸いにして、本学現代国際社会分野（社会学の教員3名と教育学の教員1名が所属）では、「社会調査実習」を開講しており、この授業を経由して「社会」を実感させることが可能、かつ、有効なように思われた。そして上記の目的をより効率的に達成するために、ビデオ分析の手法を採用した。社会科学における「ビデオカメラ」の登場は、生物学における「顕微鏡」の登場と同列に評価されることがある。音声付きで、明るく、そして充分繊細な画像が、たった300円弱のビデオテープで2時間以上も録画できてしまうのである。われわれは、撮影後、繰り返しビデオを見、静止画像にし、トランスクリプトを起こし、そして、これまで気付かれず、報告されてこなかったラジオスタジオにおける番組秩序を支える「相互行為秩序」の

詳細を、かなりの程度発見できたように思う。これは、わたしにとっても充分ワクワクする「社会の発見」であった。実習に参加した学生諸君も同じ興奮を味わってくれていたのではないか、と思っている。

つぎに、調査対象の選定に関して

社会調査実習の調査対象の選定には、チェックポイントが2つある。一つは、学生全員が積極的に調査しようと思える対象であること（学生の問題関心との一致確認）、もう一つは、プライバシー問題が比較的生じにくい対象であること（相手側から拒否されないテーマの探索）である。

私は今回の実習の構想時、すなわち、シラバスでは、調査対象として「歯科医院もしくは、消防本部の通信指令室」を候補に挙げていた。しかし、4月になって、「歯科医院研究では、学生の関心を集めがたいだろう」と考え、さらに「通信指令室では、通報者のプライバシー保護の観点から学生の研究関与を認めてくれないだろう」とも考えて、窮余の策としてそのときレギュラーコメンテーターをしていたラジオ番組をふくめた「ラジオスタジオ研究」に調査対象を切り替えたのである。ちょうど、昨年（1997年）の春から、「FMやまのは」の放送が始まったこともこの決断を私に促した。「FMやまのは」は戸外のオープンスタジオを用いて放送を行っており、ABC（仮名）放送のような整ったスタジオでの相互行為よりも素朴で分析しやすいデータが得られるのではないかと期待できたからである（「FMやまのは」のオープンスタジオでの相互行為の実際については、4章を参照）。一年を振り返ってみて、この切り替えは、うまくいったのではないかと、思っている。

調査組織の組み立てについて。班分けのことなど。

調査を複数人で行うときには、一般的に言って、いかに最後の報告時に研究内容が重ならないよう棲み分けをするか、ということが重要である。これに失敗すると調査組織の参与者相互の人間関係が険悪になる。調査実習においては、この棲み分けをある程度は、教員がリードして行わなければならないだろう。私は、当初この目的から、4つの班を設置した。「空間（研究）班」、「人間（研究）班」、「文献（研究）班」、「インタビュー班」の4つである。各班には以下のようなテーマを与えた。

「空間（研究）班」については、ア）ラジオスタジオの設備と人間との相互行為、イ）ラジオスタジオ内の調整室のディレクターとアナウンサーとのガラスを隔てた相互行為、の分析。

「人間（研究）班」については、ア）アナウンサー同士の相互行為、イ）アナウンサーとスタジオ内のコメンテーターやゲストとの相互行為、の分析。

「文献（研究）班」については、ア）番組スタッフが、番組づくりに用いている諸資料（「Qシート」や番組全体の「進行表」=機械の人間用=を含む）、イ）番組スタッフが前提としている知識を示す資料（機材のマニュアル、新任者研修用の業務紹介マニュアル、放送関連専門学校での教科書等を含む）、ウ）上記資料の観点からみた行為者の相互行為、の分析。

「インタビュー班」については、エスノメソドロジック的研究になじめない学生もいることを予想して、ア）アナウンサーへのインタビュー、イ）ディレクターへのインタビュー、ウ）コメンテーターへのインタビュー、の分析。

学生が当初は12名いたので、この4つの班に各3人ずつを割り振り、研究を開始した。しかし、研究を進めていくうちに、「文献班」の研究が困難であることが判明した。A BC放送（仮名）には、新任研修マニュアルがなく、機械の操作にしろ、ディレクターとアナウンサーとのコミュニケーション方法にしろ、ありとあらゆることが、「ON THE JOB TRAINING」によって修得されていることが次第次第に分かってきたのである。そこで、それまでは、どの班もが自由にアクセスして良いデータとしていた「FMやまのは」のビデオデータを、「FMやまのはのデータ（データY）を主題にできるのは 班のみである」と定め、 班の名前も「FMやまのは班」に改名した。

その後、論文執筆過程の中で、この当初の枠組みはさらに組み替えられていく事となった。すなわち、結果としては、班の名前とその研究内容が一致しなくなったといえよう。たとえば、「空間班」と「人間班」はどちらも調整室とスタジオとのガラスを挟んだコミュニケーションを扱っているし、また、「インタビュー班」のメンバーも相互行為分析に意欲的であったので、ビデオデータを用いた分析を行っている。

これは、ビデオのデータというものが膨大で容易には分析し切れない、ということに由来する事態であるといえよう。とにかく、当初の「テーマの取り合い」という心配は杞憂に終わってほっとしている。

まだまだ書きたいことは多いが、報告書の本体は苦労話であるべきではなく、研究内容の報告であるべきである。私の調査に関する枠組的記述はここまでとするのがよいだろう。さいごに、このたった2単位の調査に、当該期間の大学生活の何割もの労力をつぎ込んでくれた学生諸君の努力を「ほとんど奇跡のようだ」と評価していることを記して、前書きを終わりたい。

